ロバト・ブラウニングの劇的独白詩「アプト・ヴォウルガー」

三谷　正

(一) 序
(二) アプト・ヴォウルガー
(1) 人としてのヴォウルガー
(2) 即興演奏と神秘的霊的音楽家ヴォウルガー
(a) 即興演奏
(b) 神秘的霊的音楽家ヴォウルガー
(三) ヴォウルガーの即興演奏
(1) ブラウニングのこの詩の構想と写実的手法
(2) 妙技入神の境地
(3) 音楽の永遠性
(四) 結び

(一) 序

芸術品の創作に際し、絵画に於いては、感興の起るがままに絵筆を、詩文に於いては、興にまかせて文筆を、それぞれ走らせば、絵筆の生み

だす点、線、或は、文筆の生みだす文字によって、そのまま、それが目に見える作品となり、それが永くあとに残るものである。その他の芸術も感興のままに、それぞれの道具によって、その道具の生ずる結果が作品となり、永くあとに残る。それは、それらの芸術の表現が、作品という形をとるからである。然るに音楽にあっては、人間の口であっても、他の楽器であっても、それらから生ずる声、或は、音によっては、他の芸術に於ける作品の形のものは生れない。音楽の構成要素である声、音には形がないからである。従って音楽は、演奏後あとに残ることがない。尤も音楽も、多くの場合、楽譜に移した後に演奏するところから、楽譜が作品と言えぬこともない。事実、作品と普通には取り扱われている。しかし楽譜そのものは、他の芸術の作品と同じ意味での音楽作品とは言えない。特に、音楽家が即興演奏家であるときは、楽譜がないためその音楽が、その演奏と共に消え、あとに残らないのは無論のことである。従って偉大な音楽家であっても、それが即興演奏家であれば、その音楽は演奏の瞬間のみ存在して、それ以後は、永久にそれを傾聴するによしなしと言うべきものである。ドイツの音楽家ジョージ・ジョセフ・ヴォウルガー〈George Joseph Volger〉（この独白詩では Abt Volger となっている。その理由に就いては(二)の(1)参照）は偉大な音楽家であったが、かれが即興演奏家であったために、かれの死後、その音楽は後世に残らず、また、かれの名も世に知られずに終ったのである。然るに即興演奏には、エドガー・アラン・ポー〈Edgar Allan Poe〉の言葉を借れば、

「最高の芸術的感興の特殊な瞬間にのみ認められる強烈な心的落ち付きと集中力[1]」

が必要である。これは普通人には見られない異常な才能であり、言わば、一種の天才である。従って即興演奏家は音楽の天才というべきである。ヴォウルガーのこの偉大な音楽的天才を認めるロバト・ブラウニング〈Robert Browning〉は、ヴォウルガーが大天才を抱きながら世に忘れ去られていることに深く同情し、かれを再び世に認めさせることを念願して、この独白詩をものし、ヴォウルガーの即興演奏を通して音楽と他の芸術との相違、音楽の創作過程、音楽家の従って芸術家の妙技入神の境地、音楽の、従って芸術の永遠性等を、詩的に、宗教的に、否、極めて神秘的に表現しているのである。エドワード・ダウデン〈Edward Dowden〉は

「この詩は芸術と宗教の相会する境界点に触れるものである[2]」

と言っている。

(二) アプト・ヴォウルガー

(1) 人としてのアプト・ヴォウルガー

ロバト・ブラウニングの独白詩「アプト・ヴォウルガー」〈Abt Volger〉は、アプト・ヴォウルガーという音楽家の独白から成っている。実在の人としては、本名をジョージ・ジョセフ・ヴォウルガーと言い、普通にはアベ・ヴォウルガー〈Abbé Volger〉と呼ばれていた。しかしブラウニングはこの独白詩ではアプト・ヴォウルガーとしたのである。英語の abbot をフランス語で abbé というのであるが、このフランス語の abbé は大修道院〈abbey〉の管主でない僧侶を指すとき、英語でもこの言葉を採用し、ヴォウルガーは大修道院の管主でなかったので Abbé Volger と言われていたのである。ところが Volger がドイツ語であり、abbé のドイツ語が Abt であるところから、Volger と Abt とを釣合せて、Abt Volger としたのであった。ヴォウルガーはオーガニスト〈organist〉(オルガン音楽家)で且つ作曲家であった。ドイツのヴュルツブルヒ〈Wurzburg〉に一七四九年に生れた。父はカトリック信者でヴァイオリン製作工であった。その頃のカソリック信者の慣習に従って、父はその子を幼い頃から僧侶としての教育を受けさせたのではあったが、傍ら、子の音楽的才能を認め、それを伸ばすことに努めた。その結果、ヴォウルガーは十才にして早くも、オルガン及びヴァイオリンを極めて巧みに演奏するようになった。理解あるこの良き父のお蔭で、かれはバンベルグ〈Bamberg〉或はマンハイム〈Manheim〉と諸所で音楽の修業をすることができた。やがてローマに出て僧侶の資格を得たが、再びマンハイムに帰り、その土地の王侯の宮廷牧師兼音楽師に任命され、また、その地に、はじめて音楽学校を開き、幾人かの弟子を養成した。時に令二十七才。かれがいかに音楽的天才であったかが伺われる。この頃までは順風に帆を揚げるの状態であった。かれは勢に乗じて作曲、発声技術に関する書を著わした後、ミュンヘン〈Munich〉に行き、幾つかのオペラ〈opera〉、バレー〈ballet〉、メロドラマ〈melo-drama〉を発表し、オペラはミュンヘンの宮廷劇場で演ぜられた。しかしこれはあまり評判がよくなく、音楽批評家によって厳しく非難された。音楽家モツアルト〈Mozart〉もその非難者の一人であった。これは、多くの先覚者がそうであったように、かれが音楽界の革命家であったためである。かれは当時のマナリズム〈mannerism〉に堕した楽壇の大家に飽き足らず、新しい道の開拓を望み、新しい音楽理論を提(ひつさ)げて、新しい弾奏法、新しい楽器の創造をなし、非常な情熱を以って音楽界の革命に乗り出した。これがため叛逆者、異端者と攻撃されて、かれの新

創造は祖国の楽界には容れられなかったのである。かれは祖国にとどまるを心よしとせず放浪の旅に出るのであった。かれはフランス、スペイン、ギリシャ、西アジア、アフリカ、遠くグリーンランドにまで足を延ばすのであった。尤もこの放浪の旅は、前述のマナリズムに堕し、旧態依然たる楽界への反撥ではあったが、一面また、楽界の大家の演奏する音楽が、都市の人士の間に喜ばれ、既に有名となれる音楽のみを音楽の最高のものとなす独断的、因襲的な権威主義に反対し、都市ならぬ自然の山野に住む鄙の人の口吟(くちずさ)む歌謡の純真さの中に寧ろ音楽の真髄が見出され、新しい創造の世界が開拓されるであろうと考えたからであった。この考えは、教養ありげの都市の人士よりも庶民に、或は既に重要とされているものよりも平凡なもの、卑近なものに、却って意味の重要性があるとする近代精神であり、ヴォウルガーがこの精神を把握していたことを証明するものであった。けれどもかれの放浪時代は苦難の連続であった。かれがパリー〈Paris〉にあって製作し、上演した喜劇オペラは上演の途中で中止せざるを得なくなったこともあった。この頃のかれの悲惨な気持は言語に絶するものがあった。しかしかれは自らの音楽家、芸術家としての自信は微塵も失うことはなかった。このときの心境が表現されているのが、この独白詩の第十一聯の次の句である。

「この世に於けるわれらの失敗は、
　時満つるの日の勝利の証(あかし)ならずして何なるか。
　われら意気萎(しお)れ、心悶えしか。
　われら、さにあらずとせば
　再び歌い始めるまでの
　永き休止の存在何(なに)なるか。
　不協和音の乱入は協和音を賞でんがためにあらざるか。
　悲しみに堪(かた)えるは難く、
　疑の晴るるは遅し。
　悩めるもの
　己が禍福の言い分、

また、意見あらんも、
神の囁き賜うは、
僅少のわれら楽人のみ。
世の諸人、自由気侭に、
理窟をこねるもよからん。
神の囁き知悉するは、
われら楽人のみなれば[8]」

と。けれども、かれがストックホルム〈Stockholm〉に行き、第二の音楽学校を開いてからは、幸運もめぐってくるのであった。ここで自らの発明した楽器 Orchestrion を用いて演奏し、稍有名となり、ついでロンドンに行き、名声大いに揚り、はじめて音楽家として認められるに到った。やがて祖国ドイツに帰り、コブレンツ〈Coblentz〉、フランクフルト〈Frankfort〉、エスリンゲン〈Esslingen〉で大いに歓迎され、マンハイムに於いては非常な人気を博した。以後は欧州各地に足を運ぶのであった。最後にはダームスタト〈Darmstadt〉にあって大公ルイ一世〈The Great Duke Louis I〉の知遇を受け宮廷音楽師として迎えられた。また、その地に第三の音楽学校を開き、後に当時第一流の音楽家となったゲーンスバッヘル〈Gänsbacher〉、ウェーベル〈Weber〉、マイヤベール〈Meyerbeer〉の優秀な弟子を養成したのであった。三人の弟子の友情は互に厚く、師を中心として固く結ばれ、共にその師に対し、無限の敬愛の情を示し、師の死に到るまで変らなかったと言われている。ヴォウルガーは一八一四年六十五才を以って卒中でダームスタトで死ぬのであった。かれは音楽に生き、音楽に死んだのであった。

(2) 即興演奏と神秘的霊的音楽家ヴォウルガー

(a) 即興演奏

ヴォウルガーは十八世紀の欧州第一流の音楽家であった。オルガン音楽家として、また、作曲家として第一等の人であった。然るに、かれの死後は、その楽譜を知る人とてなく、その音楽理論も棄てて省みられず、かれの発明にかかる楽器も今日に伝えられていない。かれは、ただウエーベルとマイヤベールの師としてのみ記憶されるにすぎない。否、それすら忘れられ勝ちである。これは何故であろうか。それは、かれの演

奏が即興演奏であったからである。普通、音楽家は、興起れば直ちにそれを譜に移す。譜に移してのち、演奏する。楽譜そのものは、それ自体としては音楽でないにしても、音楽を生みだす母体としてあとに残る。従って他の音楽家も、後世の音楽家も、楽譜さえあれば、それによって幾回となく、音楽を奏ずることが可能である。然るにヴォウルガーは、かれの興の起るとき、それを譜に書き留めるにはあまりに興の切なるものがあり、興の起るや、間髪を入れず楽器でそれを奏せざるを得ない音楽家であった。しかもかれがそれを演奏したのち、それを譜に移そうとしても、それは、恰も風の吹き去りし如く、水の流れ消せし如く再びかれの胸に帰り来なかったのであった。他の芸術即ち絵画、彫刻、詩文にあっては、芸術家が感興の起るが侭に、絵筆、鑿、文筆を取り、画き、彫り、ものせば、それが作品の形で残る。その形そのものが、その芸術の表現であり、その芸術の作品であるからである。然るに音楽にあっては、演奏によって生れる音楽がその表現であるが、その音楽は形としては残らない。演奏を成立させ音楽を生みだす音、或は、声には形がないため、他の芸術のように、芸術家の胸に湧き出た感興が即時に作品という形では残らない。勿論音楽家が感興を譜に移せば楽譜としては残る。しかし楽譜そのものは音楽ではない。声、音は楽譜の中に潜み隠れてはいるけれども音楽そのものではない。勿論、楽譜のある限り、それによって幾回となく演奏されるであろう。その場合と雖も、最初にその曲を作曲せる作曲家が最大の感興を以って演奏した最初の音楽そのものとは別のものであるはづである。それは、最初の作曲者の感興に近い感興が呼び起こされるにすぎなく、しかもその感興は奏者それぞれによって異るはづである。故に最初の作曲者が最高の感興を以って奏した演奏を全く同じ感興を以って全く同じに再現することは不可能なことと言える。この故に、偉大な音楽家の死後、その音楽家の偉大な音楽をその侭の状態で、楽譜を通じて接しようとしても、それは不可能事に近いというべきであろう。その音楽家の偉大な音楽に接し得るのは、その音楽を直接聞いた過去の聴者だけではなかろうか。況んやヴォウルガーのような即興演奏家の音楽にあっては、その演奏の後に、再びそれを聴き得られることは絶対にあり得ないというべきであろう。かくしてヴォウルガーの音楽は、全く消え去って後世からは忘れ去られ、かれの名も世人の口にのぼらなくなったのであった。しかしヴォウルガーは、全くその名が消え去り、後世の人に忘れられるにはあまりに稀な才能をもった音楽家であった。否、稀な才能というよりは偉大な神秘的霊的な才能をもった音楽家であった。

(b) 神秘的霊的音楽家ヴォウルガー

ヴォウルガーの平素の振舞は、普通の人間のそれであり、普通の肉体をもった、普通の行動をする人間であった。けれども一度(ひとたび)芸術的感興

が、かれの心に起ると、かれは単に肉体をもった客体的な人間というよりは、霊的な主体的な人間と変り、宇宙の奥深くに潜むある根源的な、神秘なものの存在を感じ、芸術的には、それを造化の神と見、宗教的には、それを日には見えないある偉大な力と見るのであった。エマ・ジェー・バート〈Emma J. Burt〉の次の言葉、

「真の即興演奏家の才能は稀な天才というべきものである。その才能は、即興演奏家の平素の肉体的な、客体的な自己に属する才能ではなくかれの心の奥深くに潜む神秘的な自我と言うべきものである。それは、かれに芸術的感興の起るときにのみあらわれるものである。かれに芸術的感興の起るのは、単にかれに芸術的才能があるために起るのでなく、かれが微妙な心的、情的、霊的な状態にあるときに起るのである」[4]

は、ヴォウルガーに打ってつけの言葉である。また、真の即興演奏家はその演奏に際しては、

「平素以上に強い非物質的な、ある神秘な力に、ぢかに触れるものである」[5]

の同じバートの言葉、また、真の即興演奏家の目、耳はわれらが旧約聖書の中に於いて接する目、耳であるとの同じバートの次の言葉、

「われらが古き敬虔の書に見る目及び耳は、いづれも普通に開(あ)けられてはいるが、それらは肉体のそれではなく、正(まさ)しく魂、即ち真実の自己の目と耳の開けられたものである。それらの目、耳は、この世の果ての彼岸にあるあの世から見え来るものを見る目であり、また、聞え来るものを聞く耳である。それらあの世から見え来るものを見、聞え来るものを聞き得られるのは、先づ、芸術家の目、耳によってであり、然る後に、その芸術家を通じて、それらを見、聞くことを望む普通人にも、かれらの普通の目と耳によって見、聞くことができるのである」[6]

などの言葉は全く神秘的、霊的な音楽家ヴォウルガーの姿を言ったものである。実にヴォウルガーは、バートの言う魂の目、耳をもった音楽家であり、この世の果ての彼方にある永遠の世界、無限の世界を普通のわれわれに見、聞かせてくれる神秘的、霊的な音楽家であった。

(三) ヴォウルガーの即興演奏

(1) ブラウニングのこの詩の構想と写実的手法

世にも稀な非凡の音楽家ヴォウルガーが、この似忘れ去られるを遺憾に思い、世人が再びヴォウルガーの存在を認めることを切望して、ブラウニングがこの詩をものしたことは既に述べたのであるが、ブラウニングはこれと同時に、更に、ヴォウルガーの即興的音楽の永遠性、従って

一般音楽の永遠性を示すこともこの詩に於いて望むのであった。そして音楽の永遠性を述べるに当り、音楽創作の過程、音楽家、従って芸術家の念願の極致、妙技人神の境地に触れるのであった。かくしてものされたこの詩は、ブラウニングの芸術詩として香りの高い傑作の一つとなったのである。詩の形を劇的独白詩とし、ヴォウルガーが即興演奏の直後、それを回想する体裁にしたのである。わざわざ題句〈motto〉として

「かれの発明せる楽器にて即興演奏したる後に」[7]

をつけたのは、今、ヴォウルガーが即興演奏を回想する言葉をも、即興演奏そのままの感興に従って、その興奮の起伏を描く仕組みにしたいとの意図を示すためであった。従ってヴォウルガーが回想の言葉を発するにあたり、即興演奏と同じ芸術的感興が起ったとしているのである。そしてその起伏の状態は次の通りである。一、二、三聯（㈢(1)の引用詩句参照）では、感興の状態は落ちついた状態にある。四、五聯（㈢(2)の引用詩句参照）になると感興の度が極めて集中的になり、漸次に高調の状態となって行くのである。六、七、八、九、十聯（㈢(3)の引用詩句参照）では落ちつきと集中力が平行し、しかも調子が最高潮となり、深遠さを加えて行くのである。十一聯（㈡(1)の引用詩句参照）になると再び落ちつき中心の雰囲気にもどり、十二聯になると興奮がおさまり、芸術的感興から脱して平素のヴォウルガーにもどるように仕組まれているのである。要するに詩の内容はブラウニングのヴォウルガーに対する同情の念と、音楽の永遠性に就いてのブラウニングの思想を詩的に述べているのであるが、その体裁はヴォウルガーの口を借りて、ヴォウルガーの即興演奏の感興の起伏その侭を表現する仕組みにしたものである。われわれは、先づオルガンの前にいるヴォウルガーの姿がバートの次の言葉で想像できるのである。

「われわれの眼前に見る唯一のものは古風なオルガンの前に腰掛ける老人である。しかしこの老人の姿は、われわれを種々な想像の翼に乗せるのである。なだらかな肩に垂れる白髪の後光に輝く老人の頭は、神々しく見える。丸みある整った顔は、厳（きび）しい中に、やさしさの表情を見せている。眼光は鋭く、遠くを見つめている。この眼は、実は、かれの心の耳の傾聴するものに、その視線を送っているのである。或はまたこの眼は、かれの心の感じた侭の異様な、微妙な心像を見つめているのである。そして極めて柔軟な手が、それをかれの心の外なる世界に伝えているのである[8]」

と。こうしたわれわれの想像に浮ぶヴォウルガーは恰も霊感をうけたように芸術的感興の侭に語るのである。かれの心のうちに響く音は、そのまま神秘の世界に通ずるもののようである。かれが自らの心のうちで、かれの指がひとたび楽鍵に触れると、昔、ソロモン王が、天上、地上、

地下の、天使、人、動物、爬虫類、悪魔など諸々のものを呼び集めて、その宮殿を築いたように、かれの心のうちに、それぞれの音が、音楽の殿堂を築くのである。ソロモン王の場合、天上の天使に対し反対の立場、反対の目的、意図のある悪魔、また、人間に対し反対の立場、反対の目的、意図のある爬虫類などが、王の宮殿建設のために、互に力を合せて働いたように、ヴォウルガーの場合、かれのオルガンから発する高音、低音などの種々の音が力を合せて音楽の殿堂を築き上げるのである。そしてそれぞれの音が、それぞれの部署につき、それぞれの役目を果した後は、自らは消えて、他の音に部署を譲り、音楽の殿堂建設という全体の仕事のために、自らを犠牲にし、殿堂建設そのことに協力するのである。そして協和音、不協和音が互に融け合い、まざり合った調和ある音楽の殿堂を創造するのである。この音楽創造の過程を、ブラウニングは巧みな写実主義的手法を用い極めて克明に描写しているのである。即ち

「われ、わがオルガンに
　わが命に従うを命じ、
　楽鍵をその部署に着け、
　楽鍵の一触に
　音のすべての土隷を呼び出して、
　われの建てたるすばらしき楽の殿堂。
　天上に飛翔する天使の軍勢、
　地獄に潜む悪魔の軍を、
　ソロモン王者、
　意の侭に集めしとき、
　天国いと高く、
　地獄いと深く、
　遠く離れてある如く、

ロバト・ブラウニングの劇的独白詩「アプト・ヴォウルガー」

ロバト・ブラウニングの劇的独白詩「アプト・ヴォウルガー」

互に意図、目的の
遥るかにへだたり異れる
人、獣、爬虫、蝿どもすべて、
ソロモン王者がその
神聖の御名を称えるのとき、
瞬時に、王の目前に現われて、
王の愛するパオロの娘喜ばさんと、
素早く王に積み上げし
その宮居のごと
わが楽の殿堂。
この美わしのわが楽の殿堂、
ソロモン王者の宮居その侭、
永久に残らんことわが願いなり。
このわが楽の殿堂建てんとて、
楽鍵相集い、相群りて、
執拗に押しつ押されつ
互に、いかに競いしか。
ああ、楽鍵、互に援け力を合せ
離れては、また、結び合い、
わが称讃の声高めんと、

業にいそしむその精励。
楽鍵の一つ、盲目の飛込みもて、
地獄の下へと額を沈め、
殿堂を底つ岩根に太しき建てる。（bassの底太い音が音楽の基礎であることを示す）
やがて視界に泳ぎ上りて、
地獄の劫火に恐れももたず
いと平らけく地の底に、
わが殿堂の礎を、
確固不動に据え築く。
また、他の楽鍵、わが寵児よろしく、
上へ、上へと、登り進む。（高く飛翔する天使のように高音の軽く漂うことを示す）
或は、また、他の楽鍵、
尚、その他の楽鍵、
互に一つの群なすも（harmonyを示す）
それぞれ数多の波頭立て（多くの音が一つのharmonyをなすもその中に、波頭のようにきわだつものがあって、melodyが生じることを示す）
透明のガラスの如き黄金の（幻の殿堂の虚空に立つ妙なる描写）
凹凸の壁打ち建てる。（美しい高低の音の生ずることを示す）
楽鍵それぞれ
己が責を果しなば、
己が部署を他に譲る。

ロバト・ブラウニングの劇的独白詩「アプト・ヴォウルガー」

ロバト・ブラウニングの劇的独白詩「アプト・ヴォウルガー」

楽鍵それぞれ
相競い音を出すとも、
ひとたび響けば永久に消滅。
ローマの火つけの男ども、
広場より尖塔へ、
また、丸天井の周りをぐるぐる廻りて、
輝き燃えたたせたる火の輪廓の大照明
祝祭の夜を驚かすごと、
楽の栄光、上へ上へと登り行き（シェリーの「雲雀のうた」を思わせる）
わが楽の殿堂の頂上に達し終りぬ。
かくて、われ
わが魂の誇りとせる
わが楽の殿堂
創り成れるを
わが眼に映れるをわれ覚ゆ[9]」

と。ブラウニングは本質的には浪漫主義の詩人であったが、一面また、リアリストでもあった。ブラウニングのリアリストの面の一つが現われているのが、今、引用したこの詩句である。これはかれの写実的手法である。ヴォウルガーの音楽の殿堂建設のための、楽鍵による種々の音の働きをかくも克明に描写するところは、ブラウニングの写実主義的手法の力量が如実に示されている。しかしブラウニングの写実的手法は、写実主義の所謂対象の模写即ち客観化のみに堕するのでなく、かれは対象の模写即ち客観化の間に、かれの過去に蓄積した豊富な知識を挿入して、再び主観を挿入するところに、かれの写実的手法の特徴がある。しかもそれを巧みな比喩を用いて想像の世界を展開し、かれ本来の浪漫主

義的立場を失わないのである。かれが上述の詩句に於いて、楽の殿堂の永久性をソロモンの宮殿に擬え、また、楽の殿堂建設に際して、ヴォウルガーの意の侭に働く音を、天使と悪魔がソロモン王の意の侭に働くに似せている比喩はブラウニング独特のものである。このソロモン宮殿建設の知識はかれのヘブライ知識を示すものである。また、ソロモンが天使及び悪魔を働かすのは、土を以って創られた人間が、光から創られた天使、及び、火から創られた悪魔を自由に使用する回教徒の信仰或はヤコブ・ボーム〈Jacob Boehme〉の神秘哲学の知識である。これらの知識の挿入は、楽音という対象の客観化を克明にしながらも、かれの主観の挿入が極めて濃厚であることを示すものである。ブラウニングはこの手法によって、対象の各部分を内面的に充実して描写し、然るのちに、対象の内面的な全貌をわれわれに把握させるのである。

(2) 妙技人神の境地

ヴォウルガーは楽鍵による種々の音の働きによって建設された楽の殿堂のイメージがかれの心の目に見え、楽の殿堂は遂に実現されたかに思えるのであった。しかしそのとき、不図、同じかれの心の目に、造化の神の姿、否、造化の神の創造になる崇高の山、幽邃の水の姿といったものがあらわれるのであった。これを見たヴォウルガーは、造化の神の神秘な力を信ずるところから、人間の創造力などは限界のある微力なものであることに気づくのであった。無力な人間であるかれの創った楽の殿堂は、今、かれの心の目に映った造化の神の創造によってなれるものと比べるとき、それは果して創造という名に相応しいものかどうかを疑うのであった。そしてかれの力など、造化の神の力には、到底比べものにならないことを痛感するのであった。ここに造化の神の創造になるものが、かれの心に映ったのは、造化の神が、創造はかくあるべきであると教え、範を垂れるのであろうとヴォウルガーに思えるのであった。これをブラウニングは巧みな諷喩的手法を用いて次のようにヴォウルガーに言わせるのであった。

「わが楽の殿堂
　果してわが眼に映ぜしや、
否、その中ばをも
われは見ざりし。
われかく感ずるは、

ロバト・ブラウニングの劇的独白詩「アプト・ヴォウルガー」

ロバト・ブラウニングの劇的独白詩「アプト・ヴォウルガー」

われの産み創りなせるを見て、
自然も亦、わがものに匹敵するものを産み出さんと
われ、本能に従いて産み創れる如くに、
自然も亦、懐妊せるを
われ、しかと覚りし故なり[10]」

と。ヴォウルガーの創った音楽の殿堂は言わば絵画の下絵、素描のようなものであった。完全に出来上った絵画とは凡そ程遠い未完成のものであった。寧ろ音楽の殿堂の形骸ともいうべきものにすぎなかった。造化の神の創造になるあの崇高の山、幽邃の水のような形体と実体が共に存在する完全なものには決して比べ得ないものであった。ここにヴォウルガーは、かれの創った楽堂は芸術としての形式は出来上ったものの未だ芸術の精神に欠けるものであることを覚ったのであった。然し、芸術家として、かれの負っている使命を思うとき、そのまま諦めるにはヴォウルガーの情熱はあまりにも強いものがあった。そこで無力ながらも、芸術の形式、精神共に備わる完全なものを創り上げたい情熱に燃えてやまぬのであった。完全無欠なものの完成、芸術家の憧れの理想、天上に達しようと、更に情熱を傾けて、苦悶の努力を続けるのであった。ここに造化の神は、またも、かれに同情し、かれの情熱、かれの努力を倍加しようとして、かれを励ますために、自らも天上より地上に達しようと努力するのであった。これに刺戟され、ヴォウルガーも天上に到達しようと、更に、更に、情熱を傾けて努力するのであった。そのさまを次のように言っている。

「人に負けじと、
天上は下界に憧れ、
地上に達せんの努力するなり。
地上のわれも、わが情熱のうちに
憧れの天上に飛翔せんとて
最善を尽せり[11]」

と。芸術家は、自らが、神秘の力を持たず、また、造化の神ならぬ無力な人間であり、従って形骸的な作品しか創り得ないとき、その芸術家が真摯な人間であればあるほど、かれはその形骸的な作品を実体の滲透した完全な作品になそうとして、寝食を忘れ、心身を労し、苦悶に苦悶を重ねるものである。このとき、この苦悶の間に、偶然、霊感の閃きがあって、やがて、その芸術家は完全な作品を創り上げるということは、われわれのよく耳にすることである。この霊感の閃きというのが、造化の神が天上を離れ、地上の芸術家に力をかすことをいうのである。造化の神が力をかすということは、造化の神がその本質である永遠の生命を芸術家の作品に注ぎ込むことを指すのである。かくして天上の造化の神は地上のヴォウルガーに近づき、永遠の生命を注ぐさまが次の絶妙の詩句となっている。

「新しき光彩（造化の神の象徴）忽然として現われ、
わが光彩（芸術家の象徴）と親しみ、
わが光彩と共に住む。
楽堂の一つの尖端（さき）、一つの峯（芸術家の象徴）も
それに対応するかに見ゆる
一つ一つの遊星（造化の神の象徴）を
見出し、把え得ざるものなかりき。
その遊星、月と紛う輝く流星（造化の神の象徴）
焔と燃ゆる球体にて、
消えること、失せること
さらさらなかりき。
そは、地すでに天に達し、
天地の融合なり、
ここに天と地の遠近の隔（へだて）なく

ロバト・ブラウニングの劇的独白詩「アプト・ヴォウルガー」

時空の限界消え失せたり」[12]

と。造化の神の永遠の生命の象徴である光彩が、ヴォウルガーの未完成の形骸的楽の殿堂の内部に滲透充実し、実体を与え、未完成なものを円満具足のものとするのであった。実体とは永遠の生命そのものであるため、時空の限界も消え失せたのであった。無力な芸術家の創った形骸的作品に、永遠の生命という実体が滲透して仕上ったときの芸術家の心情を妙技入神の境地というのである。これは芸術家の願望の極致である。ヴォウルガーはこの境地に、遂に達したのであった。芸術家がこの境地に達すると、時空の限界といったものは消え去ってしまうのである。そして過去、現在、未来の一切の現象が現実として躍動するのである。現在に生きているもの即ち現存者も、未来に時機到れば生れでる予定のものも、既に一度(ひとたび)はこの世をあとに、あの世へ去った過去の人も、いづれも甦(よみがえ)って、現実に現われてくるのである。そのさまをヴォウルガーは次のように言うのであった。

「われ、この境地に達せるとき、
ただこれのみに終らざりき。
この天地融合の光輝と白光のさ中に、
歩を逆ぶ人ぞ現れたり。
この世にありて、
その姿あきらかに見られ得る現存者、
また、遠き未来にありて
順風の吹き来るとき生れ出づべき
その原形の生命より
送り出されたばかりのものたち、
遂にその意にかなえる住居なる
創造の極致に、

天地融合の世界に、
透われ来りて
ここに住まんと
歩を運びしなり。
或は、また、
空蝉の肉体はなれ
浮世を去りしも
新しきあの世にまさる
古き世界のこの浮世に
再び生存せんを望みて、
偉大と讃われし故人も
帰り来るなり。
過去にありしもの、今現われ、
やがて未来に現われるもの、
また、今現われたり。
現在あるもの
融久の過去より永遠にあらん。
そは、不完全なるわれも亦、
時空の境打ち超えて
無念無想の境地得て

ロバト・ブラウニングの劇的独白詩「アプト・ヴォウルガー」

円満具足の身とされしゅゑなり[13]」

と。このヴォウルガーの境地は、すべての芸術家の求めてやまぬものである。エリザベス・バレット・ブラウニング〈Elizabeth Barrett Browning〉もこれを切に求めて「詩人の幻想」〈A Vision of Poets〉と題するかの女の詩の中で次のように歌っている。

「われは天翔る
雲雀の如く
天上の白雲に心ひかれて
高く上る。
わが姿、
一点に見ゆ、
わが翼
小さく黒くあれど。
われは報酬を求めず、
名誉を求めず、
ただわれに示せよ
神の御旗を
光彩陸離たる神の御旗を
われ昇天するのとき
わが顔
円満具足と歌われんがために
ただ、わが哀(うち)なる音楽を

（もし神の御心ならば
涙を浮べ
血を流す思いにて）
注ぎ出すと許るされかし[14]」

と。実にヴォウルガーも空高く舞い上る雲雀のように天上に憧れた。そして天上を憧れて、遂にその夢が実現された。さきに未完成の形骸的に、かれの心に映った楽堂が、その形骸に内容をあたえられ、実体を備えた完全な楽堂としてかれの心に映るに到ったのである。ブラウニング夫人が無念無想のうちに、「光彩陸離たる神の御旗」を求め、「哀なる音楽を注ぎ出し」たと同じく、ヴォウルガーも全くの無念無想のうちに、霊的恍惚、音楽の極致、芸術の極致に達し、時空を超越し、過去にありしもの永えにあるの境地に達し、円満具足の身となったのであった。

(3) 音楽の永遠性

ヴォウルガーが前述の境地に達し得たのは、かれの情熱的努力もさることながら、かれの切なる芸術的感興を起したかれの魂の願により、それに応じて音を与えた楽鍵のためであった。また、かれの願が実現され行くを神に感謝したかれの魂のためであった。かれは言う。

「われ如意円満の境地得しは
わが魂の願に音響を与えし
わが楽鍵のためなり。
これすべてわが願の実現されゆくを
神に謝せるわが魂のためなり。
これ楽鍵とわが魂のためなり[15]」

と。しかし、ただそれだけではこの境地は得られたのではなかった。実に、その根底には神秘の力が働いているのであった。音楽以外の絵画、詩歌の創作は、ただ人間の造った法則に従ってなされるにすぎない。然るに音楽の創作には、人間が造ったと称するその法則をも、その根源に於いて創り出し、その法則の奥に存在する神の御手、手ならぬ手が働くためである。即ちヴォウルガーは言う。

ロバト・ブラウニングの劇的独白詩「アプト・ヴォウルガー」

「されど考えみよかし。
われ、いま、その全貌を
絵に画けりとせん、
それ、そこに、
一幅の絵として存在し、
肉眼にて見られ得ん。
されど、その創造の経過
さして驚嘆に値するものなからん。
われ、もし同じ全貌を文筆もて
詩をものせしとせん、
同じ原因ありて結果あるのみ。
絵画の形、何が故に美しく、
詩歌の物語るところ、
いかに美しきかは、
人、これを聞き、知悉しおれり。
絵画、詩歌、すべて芸術の勝利示すものにして、
法則に従うものなれば。
かくて画家も、また、詩人も、
その技の認められ、芸術家の列に
その名の連らなるを誇りとするものなり[16]」

と。興起りて、瞬時に絵筆を取り、文筆を用いて創作をなし、直ちに形ある作品をなし得る絵画、詩歌にあっては、それらに従事する芸術家は、その作品という形を見て、わがこと既に成れりと思うものである。然るに、音楽家、特に即興音楽家にあっては、その作は瞬時に消え去って、作品という形では残らないのである。形ある作品をなすものは、それぞれの分野の法則に従って創作に従事し、その作の形を作り得ば、それが実体のない即ち精神の欠けたる、単なる形骸にすぎなくとも、それに気づかず、実体の追求、生命の滲透など思いもよらず、わが作、既に完成せりと誤認し、それに全幅の満足を示し、やがては芸術家を気取り、古来の芸術家の列に連らなれりと誇るものである。然るに形なき作品をなす音楽家は、形ある作品をなす芸術家の従う法則に従って作をなすのでなく、その法則の背後にある神秘の力によって創り出すのである。即ち音楽家は、ただ法則に従って三つの音（三の数は当時の神秘哲学では神秘なものとされた）を合せて第四音をつくるというのでなく、神秘の力によって、夜空にあって、天の秘密を囁くかに、霊妙に輝く星を（星は当時のユダヤの伝説では人間に天の秘密を囁くとされていた）創り出すのである。かかる意味を伝えているのが次の詩句である。

「然れども、ここに神の御手あり、
すべての法則の背後にありて、
それらを創り出し賜う全能の
意志の閃きあり。
見よ、それらの存在するを。
音楽ならぬ芸術にありて
この賜物の人に与えられしを
われは知らず。
神は三音よりして第四音を
創り賜うに非ずして
星を創り賜うなり。
これを考えみよかし。

ロバト・ブラウニングの劇的独白詩「アプト・ヴォウルガー」

ロバト・ブラウニングの劇的独白詩「アプト・ヴォウルガー」

われらの音階それぞれは
それぞれ自体にては無に等し。
かかる音階、世のいづこにも存在す。
それらは高低以外の何ものならず、
それらをわれに与え用いしめんか
われ、それを胸中の二音とまぜん。
然るとき、そこに、
人、耳に聞くのみかは、
目にも見ゆるもの現われん。
これを思えば、頭ぞさがる」[17]

と。これは、ヴォウルガーが形式よりも内容、外面的形式美よりも内面的生命美、従って内的調和、永遠の生命に憧れたことを示すものである。ブラウニングが、物の外面の部分、部分よりも、物の深奥、物の全体に滲透している秘密、即ち物の形骸よりも物の本質を把えようとした詩人であったがため、ヴォウルガーをして、音の一つ一つといった音楽の部分よりも、一つ一つの音の深奥、音楽全体に滲透している神秘な力を把える音楽家であることを語らしめたのであった。

さりながら、絵画、詩歌に比して、音楽の存在のいかに果敢なく思えることか。

「ところで、遂に、消え去れり、
われの築ける楽の殿堂。
げに消え去れり[18]」

と、さすがのヴォウルガーも歎く。一瞬かれはジョン・キーツ〈John Keats〉の

「そは幻か、現の夢か、

調べはやみぬ。
われ醒めたるか、
はた、眠れるか[19]」

或はウィリヤム・ワズワース〈William Wordsworth〉の

「わが幼き頃の幻影の光
いづこに去りし。
わが幼き頃の栄光、また、夢
いま、いづこにありや[20]」

の心情に陥るのであった。かれは、

「美わしの殿堂なりしにと
口より出づるに、あまりに遅き
讃辞なる慰めのやさし涙、
いま、人の頬にはふり落つ。
消え去るの運命荷うもの
やがては消えて亡びること
人、最初より確信すれど、
そのこと思うだに恐れありて
敢えて口にせざるが故に。
げに、消え去りしもの再び帰らず、
されど、それに等しきもの

ロバト・ブラウニングの劇的独白詩「アプト・ヴォウルガー」

否、それより勝れしもの
数多来らんと、人慰めくれん[21]」

と人の慰めの言葉を口にするのではあったが、本質を見るヴォウルガーは、自らの幻の楽堂が消え去っても、楽堂の本質は消え去るものではない、消え去ったのは楽堂の形骸にすぎないと確信するのであった。そして言う。

「されど、われの救わるは、
常に変ることなく同じきもの、
常に変ることなき同じ性質なるもの、
常に変ることなく愛するもの、
常に変ることなき神そのもの、
然り、過去にあり、
永えにあるものにこそ、
われ、心より縋るなり。
かるが故に、われ、
なんじ神聖の御名のほか
誰に向わん。
手ならぬ手もて、
わが殿堂を築ける
なんじ、建設者よ、創造者よ[22]」

と。かく神聖の御名をのみ信ずるかれにとっては、神のみが真実の力を持つものであり、その真実の力とは、神そのものでさえあった。従ってその力によって創られたものは永遠の善〈Eternal Good〉であると考えるのであった。人は善の反対は悪であるという。しかし悪は何の力に

よって為されるというのか。悪は人間自らによって為されるかに思えるにすぎないものではないか。人間には力などあるであろうか。人間に為されるかに思えるにすぎない悪に力などあるはづはない。力とは神にのみ存在するものである。否、力とは神そのものである。悪の力などというのは、人間が単にそう思うにすぎないものではないのか。かるが故に、悪の力、また、悪なるものはこの世に存在し得ないものなのである。皆無なのである。この世に存在するものはすべて善なるものである。ただこの世に於ける善は円の一部の弧にすぎないのである。これらは天に於いて初めて完全な円となるものである。かくヴォウルガーは考えるのであった。かくしてかれは言う。

「何とや、永久に変らぬ
なんじの創り賜いし
わが楽の殿堂
消える恐れありと
人の言うとや。
なんじの力は
寛容の心情を
人の胸に満たすなり。
その力をば
疑う人のありと言うか。
いかなるものも
善きものは
亡びることついぞなきなり。
過去にありしもの
永えにあるなり。

ロバト・ブラウニングの劇的独白詩「アプト・ヴォウルガー」

ロバト・ブラウニングの劇的独白詩「アプト・ヴォウルガー」

善からぬものと
世に言えるもの
存在することなく、
皆無というべし。
善からぬものの
存在するやに
人の言うは、
存在するやに、
われらの心に忍しむる
響なき沈黙にすぎざるなり。
善からぬものと
見えしものにも
善からぬものと
見えし分だけ
善きこと加えて、
過去に善かりしもの
永久に善からん。
地上に於ける
欲けたる円弧は
天上にありて

完き円となるべし」㉙

と。ここにヴォウルガーは、自らの楽の殿堂の建設者、創造者の計り知れない崇高な力、神秘な力に縋り、これにのみ向うのであった。これこそ、ヴォウルガーが自らの感興の最高調のうちに、宇宙の神秘、永遠の生命の核心に触れ、音楽の、従って芸術の本質を突き得たと言えるものである。遂にかれは音楽の永遠性を把え得て喜びのうちに言う。

「われら善きことにつきて
願い、希望し、夢みるもの
すべて存在するならん。
その存在するは、
その形骸ならずして、
その実体。
生命の囁き消え去りし
美ならず、善ならず、
また、力ならずして、
永遠の実在
刹那の構想肯定のとき、（刹那は永遠の一瞬であり、われわれ人間の一瞬の存在も永遠につながる構想拙著、生命のリズム第二編第三章参照）
楽の奏者に生きて
残るものなり。
現実の世にありて、
あまりに高貴にすぎるもの、
あまりに壮烈雄大なるもの、

ロバト・ブラウニングの劇的独白詩「アプト・ヴォウルガー」

大空に消えんがために、
地上を遥るかに離れ行く
燃える情熱、これこそ、
神の愛する歌人より
神に送らるる音楽ならん。
この楽、
神、ただ一度(ひとたび)聞きて
満足し賜うもの、
この楽、
やがては、われらが耳に
達するを得ん[24]」

と。

(四) 結び

ブラウニングはこの詩に於いて、即興演奏家アプト・ヴォウルガーの即興演奏という特殊な音楽家の特殊な芸術的感興を把えて音楽の永遠性を説くのである。そしてかれの説く音楽の永遠性は浪漫派詩人の永遠への憧れにつながるものである。従ってこの詩は浪漫主義的なものである。しかし単に浪漫主義的な詩と言うだけでは物足りない感のするものである。この詩には理想主義的詩人の面と同時に、宗教詩人的の面が濃厚であり、手法に於いて写実的手法及び、次に述べる象徴的手法も用いられているからである。即ち、先づ手法に於いて、楽鍵による種々の音の活動を克明に描写する写実的手法を用いていることは既に述べた通りである。次には、楽堂の一突角、一尖端と輝く流星の接点に天地融合の妙技入神の境地を描き、また、神は三音より第四音を創るにあらずして、星を創るという芸術創作上の偉大な言葉をヴォウルガーに言わせてい

るところは象徴的手法によっているのである。この二つの手法を用いながらも、種々の比喩を巧みに駆使して、われわれを想像の奥深い世界に導き、音楽の内面的、内容的調和の世界を把握させるところは浪漫主義の立場を忘れていない。そして結局に於いて、浪漫主義的憧れの世界、時空を超えた永遠の生命の世界へとわれわれを駆り立てるのである。この故に、わたくしは、この詩は写実的、象徴的、生命的な浪漫主義の詩と言いたいのである。かくして、われわれは、この詩によって芸術作品として形体のない音楽も、永遠の相の下にあっては、目に見えない、指なき指、手なき手にて奏(かな)でだされる永遠世界の芸術であり、現在にあり、過去にあり、未来にもあって、永(とこし)えに存在する芸術であるという意味が理解されるのである。

〔註〕

① Edgar Allan Poe : The Fall of the House of Usher, paragraph 17.
② Edward Dowden : The Life of Robert Browning, p. 236.
③ Robert Browning : Abt Volger, st. xi.
④ Emma J. Burt : The Seen and Unseen in Browning, The Musician —'Abt Volger' p. 9, l. 25—p. 10, l. 4.
⑤ Ibid., p. 10, ll. 9—11.
⑥ Ibid., p. 11, 4—12.
⑦ Robert Browning : Abt Volger, Motto.
⑧ Emma J. Burt : The Seen and Unseen in Browning, The Musician —'Abt Volger,' pp. 8—9.
⑨ Robert Browning : Abt Volger, st. i—iii, ll. 1—23.
⑩ Ibid., st. iv, ll. 25—26.
⑪ Ibid., st. iv, ll. 27—28.
⑫ Ibid., st. iv, ll. 29—32.
⑬ Ibid., st. v, ll. 33—40.
⑭ Elizabeth Barrett Browning : A. Vision of Poets, st. 234—236.
⑮ Robert Browning : Abt Volger, st. vi, ll. 41—43.
⑯ Ibid., ll. 43—48.
⑰ Ibid., st. vii, ll. 49—56.

⑱ Ibid., st. viii, ll. 57—58.

⑲ John Keats : Ode to a Nightingale, st. viii, ll. 79—80.

⑳ William Wordsworth : Intimations of Immortality from Recollection of Early Childhood, st. iv, ll. 56—57.

㉑ Robert Browning : Abt Volger, st. viii, ll. 58—62.

㉒ Ibid., st. viii, l. 63—st. ix, l. 66.

㉓ Ibid., st. ix, ll. 67—72.

㉔ Ibid., st. x.

参考文献

1. Emma I. Burt : The Seen and Unseen in Browning, Oxford : Basil Blackwell, 1923.
2. Edward Dowden : The Life of Robert Browning, Everyman's Library Edited by Ernest Rhys.
3. Poems of Robert Browning, A Selection Made by Sir Humphrey Milford.
4. Poems of William Wordsworth : Selected, with Prefatory Notice, by Andrew James Symington.
5. The Poetical Works of John Keats, Illustrated by A. A. Dixon.
6. Edward Berdoe : The Browning Cyclopaedia, George Allen and Unwin Ltd.
7. The Poetical Works of Elizabeth Barrett Browning, Oxford University Press.
8. Selected Poems of Robert Browning by Kenji Ishida and Rinshirō Ishikawa, Kenkyusha.
9. 畔上賢造著　宗教詩人としてのブラウニング
10. The Raven, The Fall of the House of Usher, and Other Poems and Tales, edited by W. P. Trent.